

菅虎雄の妹ジュンと尚絅女学校

森 正 人

一 はじめに

菅虎雄（一八六四―一九四三）は第五高等学校、第三高等学校、第一高等学校等の教授としてドイツ語を担当するとともに、書家としての名声が高かった。多くの作家達と交流があり、文学史上も注目すべき一人である。ことに夏目漱石との関係はよく知られていて、兩人は学生時代から長きにわたって深い関係を結んでいる。そのことについては、原武哲『夏目漱石と菅虎雄 布衣禅情を楽しむ心友』（教育出版センター 一九八三年）に漱石と虎雄兩人の伝に関する詳細な調査がまとめられ、これにより漱石研究における虎雄の位置は定まったと認められる。

明治二十九（一八九六）年四月、漱石は第五高等学校に教授（嘱託）として着任し、住まいが決まるまでの間、同僚となった虎雄の宅に一時期身を寄せたことがあった。虎雄には弟妹があり、末の妹ジュン

ンがその当時同居していた。漱石が熊本市の光琳寺町に居を構えてからも、学校からの帰途しばしば虎雄宅に立ち寄り、ジュンと漱石は顔を合わせる機会があったとされ、ジュンは漱石伝を彩る一人となっている。

ジュンはまた、虎雄が漱石から受け取った書簡を多数預かり、虎雄没後も保管していたとされる。ジュンはそれらの書簡を後年すべて焼き捨てたとされ、そのなかには全集に収録されなかったものも含まれていたと伝えられる。この点でも漱石の伝とは因縁浅からぬ人物であった。

ジュンは虎雄の妹という点だけでなく、和歌、書に相当の技倆を備え、また個性的な人となりが魅力的であったとして注目され、評伝も刊行されている。

江下博彦『漱石余情 おジュン様』（西日本新聞社 一九八七年）、小城左昌『夏目漱石と祖母「一富順」』

（私家版 二〇〇六年、再版二〇一〇年）で、どちらも夏目漱石との関係を軸に記述がなされている。

これらの評伝には、ジュンが熊本の尚絅女学校の卒業であると記述され、そうであれば尚絅学園史の観点からも注意される。本報告は、尚絅学園資料を調査して、尚絅女学校卒業との説に検証を加えようとするものである。

二 ジュンを尚絅女学校卒業とする説

菅ジュンは、原武哲『夏目漱石と菅虎雄 布衣禅情を楽しむ心友』の調査によれば、戸籍名がシユン、明治十二年五月十二日生まれ、除籍謄本には菅京山の四女と記載されているという（一四頁）。結婚して一富姓となる。自らはしばしば順と表記し、また順子と署名することもあった。原武は、ジュンについて次のように記載している。

幼少のころは、両親の膝下で育ったであろうが、学問が好きで、負けず嫌い、男勝り、向学心旺盛な彼女は、熊本の尚絅女学校に入学、兄虎雄の家から通学し、明治二十八年十二月速成裁縫

科を卒業した（『花桜会名簿』三頁）。

（同右書二三二頁）

原武は、ジュンが尚絅女学校を卒業したことについて、旧制の尚絅高等女学校および戦後の尚絅中学校、尚絅高等学校の同窓会組織である花桜会の名簿によって確認しているが、このことを最初に指摘したのは江下博彦であった。原武は、江下博彦が『全国五高会会報』第二十二号（第二十六号（一九八〇年九月、十二月、一九八一年三月、六月、九月）に「おジュン様（第一部）」（第四部）「おジュンさま裏ばなし」として連載し、後年『漱石余情 おジュンさま』としてまとめられることになる調査に依拠し、江下の調査と記述を随所に引用している。先に掲げた一文の「学問が好きで」以下のジュンの人柄について記すところも、江下の記述に基づくものと見られる。

学術的評価の高い原武の著書に引用記述されたからであろう、菅ジュンが尚絅女学校の卒業生であるとは、先に掲げた『夏目漱石と祖母「一富順」』のほか、『夏目漱石外伝 菅虎雄先生生誕百五十年記念文集』

（菅虎雄先生顕彰会 二〇一四年）に収録される、以下の三篇の論文や文章に祖述されている。西川盛雄「菅虎雄と夏目漱石を繋ぐもの」、小城左昌「大伯父「菅虎雄」と戦前の「旧制高校」、樋口明雄「久留米版「続・明暗」」。西川盛雄はまた、ジュンを『草枕』の那美さんのモデルの一人であろうと論ずる、『草枕』那美さんのモデル再考「菅虎雄の妹順のこと」（『方位』第三十一号 二〇一四年一月）にも、小城左昌の『夏目漱石と祖母「一富順」』に基づいて尚綱女学校の卒業生であると記述する。

三 速成裁縫科卒業の管ジユエは別人

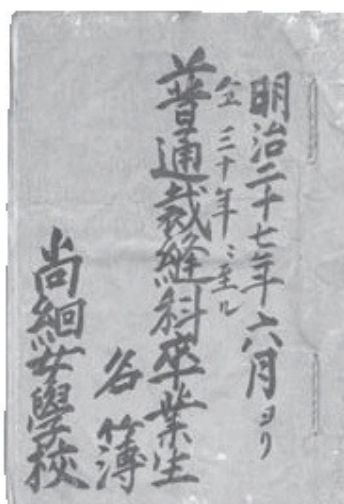
花桜会所蔵の卒業生名簿の最も古いものは『大正六年三月／卒業生名簿／熊本縣私立尚綱高等女学校』で、これに「明治廿八年十二月速成裁縫科卒業」として「管ジユエ 不明」と掲載される。従来これが菅ジュンと見なされてきた。なお、「不明」とは住所のことである。卒業生名簿はこの後も次々と作成され刊行されており、これらを追跡しても「管ジユエ」の消息はついに明らかにならない。

長くその所在が忘れられていたが、この度新たに出現した『熊本縣私立尚綱高等女学校一覽（自明治廿一年二月／至明治卅六年十一月）』（¹）という資料がある。最も古い尚綱高等女学校史というべきもので、これにも「第六章 生徒」として卒業生氏名一覽が掲載されている。そのなかの「裁縫科卒業生徒氏名」、明治廿八年十二月の項に「熊本 菅ジユエ」が見える。しかし、これらの記載と菅虎雄の妹ジュンとは一致しないところが多い。

この問題は、尚綱中学校・高等学校所蔵、表紙に『明治二十七年六月ヨリ／全三十年ニ至ル／普通裁縫科卒業生／名簿／尚綱女学校』とある資料によって明快に説明できる。ただし、この一冊は複雑な過程を経て現在の姿と

なったものである。本資料の性

格と価値を明らかにするためにも書誌について記しておく必要



図版1 卒業生名簿表紙

があらう。

表紙は茶色、縦二四・三cm、横一六・一cm、四穴を開けて仮綴じに麻紐で綴じる（図版1）。首尾に罫紙各一丁の遊紙があり、全体は次の通り八部に分かれる。

（一）「明治二十七年六月裁縫速成生及撰科／裁縫卒業生順序」（本文罫紙六丁、遊紙罫紙四丁）

（二）「明治二十八年速成／裁縫科卒業人名」（「速」の右肩に「三月」と朱書。表題無罫紙一丁、本文罫紙六丁、白紙一丁）

（三）「明治廿八年十二月／速成裁縫科卒業生名簿／尚絅女學校」（罫紙一丁、本文罫紙六丁）

（四）「明治二十八年度／卒業生并進級生 人名」（「度」を朱で見せ消し。表題無罫紙一丁、本文罫紙三二丁、無罫紙一丁）

（五）「明治二十九年三月卅一日／卒業生 普／高／速 共 割印簿／尚絅女學校」（表題無罫紙一丁、本文罫紙二五丁、遊紙罫紙二丁）

（六）「明治二十九年七月三十日／第五回 速成／及／普通 裁縫科卒業人名簿／私立尚絅女學校」

（表題罫紙一丁、本文罫紙一二丁、遊紙罫紙一丁）

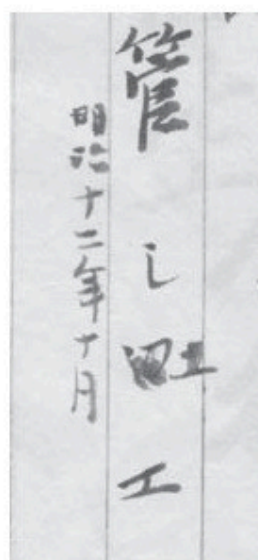
（七）「明治三十年高等科卒業」（本文罫紙四丁）

（八）「明治三十年普通科卒業」（本文罫紙五丁）

（一）の十丁分を除き、（二）～（八）の部分のそれぞれはいずれも紙縫りで仮綴じされ、さらに全部が合綴されている。したがって、各部分はそれぞれ別個に作成されたと認められる。

改めて表紙を観察すれば、「ヨリ／全三十年二至ル」の文字は行間に小さく書き込まれており、後補と見なされる。つまり、表紙には始め「明治二十七年六月／普通裁縫科卒業生／名簿」と記されており、本来（一）部分のみの表紙であって、（二）～（八）を合綴するに当たり補記されたと認められる。^②そして、（二）以下の「明治二十八年速成／裁縫科卒業人名」等の文字は合綴される以前の各冊子の表題であった。また、この資料の性格を端的に示すのが、卒業者の氏名の書かれた上部に、学校印が割印で押捺されている点である。「尚絅女學校印」の文字が読み取れる。（五）には「割印簿」の文字も見える。こうして、本資料は卒業生名簿の原本と認定しうる。

問題の管ジュエの名は(三)に見える。(三)は「速成裁縫科卒業」と題されるが、詳しく説明すれば、はじめ「高等裁縫科卒業」とし、「高等」を朱の斜線で抹消し左に「速成」と朱書する。「號外」と頭書し、原籍の「熊本縣」および族籍に続けて「管シユエ／明治十二年十月」として載る。ただし、名は「シツエ」とし、「ツ」を墨で消し右に「ユ」と墨書する(図版2)。「明治十二年十月」は管シユエ(ジュエ)の生年月である。これによって、尚絅女学校の速成裁縫科を卒業した管ジュエと菅虎雄の妹ジュンとは、本籍、姓名の表記、生年月のどれも一致しない。別人とすべきであろう。



図版2 卒業生名簿
(部分)

「菅シユエ」の名はまた(四)部分の明治二十八年「度」の「裁縫撰科生 第二年級」にも載る。速成科を卒業して撰科に進んだということか。

なお、尚絅女学校は卒業生の多くを小学校の教師として送り出していたが、速成裁縫科はもっぱら小学校の裁縫教師を養成する課程であった。(3)

四 尚絅女学校学籍簿の菅シユン

尚絅中学校・尚絅高等学校には古くからの学籍簿が残されていて、管ジュエ在籍当時、また菅ジュンの在熊時期の以下の学籍簿を調査することができた。

(一)『明治二十七年改正／至同二十九年三月／生徒学籍簿／私立尚絅女学校』

(二)『明治廿八年四月／生徒名簿／尚絅女学校』

(三)『明治二十九年／生徒学籍簿／三月以降 尚絅女学校』

しかし、これらに管シユエの名を見いだすことはできない。明治二十八年当時の速成裁縫科の修学期間は三ヶ月であるけれども、明治二十七年改正以前からの在籍であろうか。

一方、右の(三)(図版3)(4)に「菅シユン」の学籍簿(図版4)が綴じられている。虎雄の妹であることが確認される。記載項目を掲げると次の通り

である。

生年月日 明治拾貳年五月十二日
入学年月日 明治廿九年四月十三日
原籍寄留 久留米市呉服町四拾貳番地
父兄職業氏名 菅京山
証人住所 詫広郡黒髪村大字宇留毛
四百三十番地寄留⁽⁵⁾

証人氏名

菅虎雄

入学前略履歴

福岡縣久留米高等学校卒業

入学級

高等科第一年

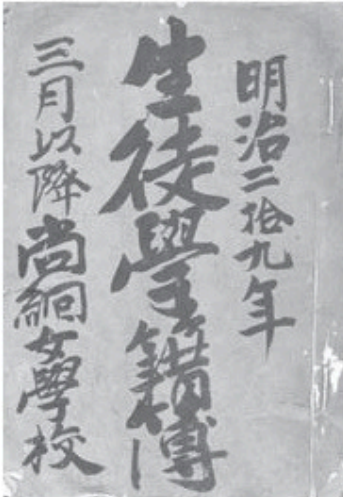
退学

明治二十九年十二月十六日(朱)

事由

○(朱)

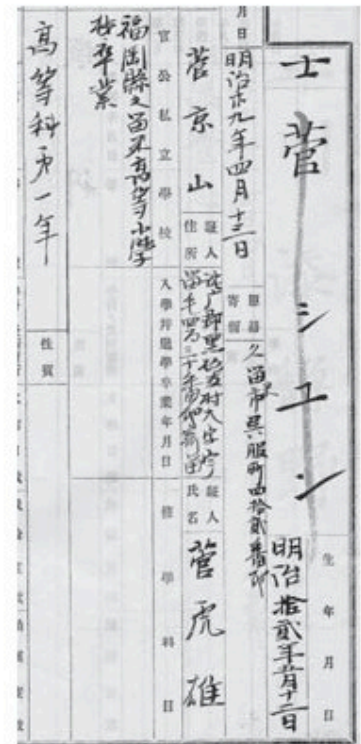
高等小学校卒業の学歴を持つ生徒は、高等科(修業年限二年)に入学する。右の通り菅ジュンの在籍期間は明治二十九年の七ヶ月余であった。退学事由の欄に朱で○印を書き入れてある。そ



図版3 生徒学籍簿表紙

の意味するところは明らかでないけれども、ジュンと同じ日に退学した生徒が他に三名あり、それらにも○が記入されている。

注目すべきは菅虎雄の住所である。明治二十九年四月十三日に漱石が旅装を解いた家は、蒲池正紀の紹介した五月三日付け水落露石宛書簡によって、一般に熊本市薬園町六十二番地の菅宅とされている。⁽⁶⁾ただし、水落宛書簡が薬園町六十二番地から発信されたとの判断には根拠がない。この時期の菅宅は薬園町六十二番地であるとの誤った認識が持ち込まれているにすぎない。漱石が熊本に到着した日には、すでに菅虎雄は黒髪村宇留毛四百三十番地に居住していた。



図版4 菅ジュン学籍簿(部分)

【注】

(1) 森正人「『済々黌附属女學校創立ノ主旨』について—尚綱学園史補正—」(『尚綱大学研究紀要A 人文・社会科学編』第四八号 二〇一六年三月)にその概要を紹介した。

(2) ただし、明治二十七年の普通科卒業生の名簿は合綴の際に引き除かれたのかもしれない。

(3) 『熊本縣私立尚綱高等女學校一覽』明治二十九年の項に、「創立ヨリ此ニ至ルマテ三百七十五人ヲ出ス。而シテ其中各都市及各縣ノ小學校ニ從事セルモノ百二十六人ナリ」と記す。

(4) 茶色の表紙、法量は縦二八・二cm、横二〇・二cm、紐により仮綴じ。学籍簿は氏名、生年月日等の生徒の身上に関する各項目を記入する欄を一紙の左右に印刷し、二つ折りにする。これに毛筆により墨または朱で書き入れてある。

(5) 正しくは、この年四月一日に託麻郡と飽田郡とが合併して成立した「飽託郡」とあるべき。また、黒髪村は、合併される以前の託麻郡でなく飽田郡に属していた。

(6) 蒲池正紀「『熊本の漱石』雑考」(『熊本商大論集』第四五号 一九七五年三月)。

新書版『漱石全集第三十五卷 補遺』(岩波書店 一九八〇年)、『漱石全集第二十二卷 書簡上』(岩波書店 一九九六年)の水落露石宛書簡に対する「熊本市薬園町六十二菅虎雄方より」という説明は、蒲池の論文に拠ったと推測される。

【付記】

本稿をなすに当たり、資料の閲覧と掲載を許可してくださった尚綱中学・尚綱高等学校、同窓会名簿の閲覧をお許しいただいた花桜会に御礼申し上げます。原武哲氏、村田由美氏は資料および参考文献等について種々御教示くださった。また、岩波書店編集部には『漱石全集』に対する筆者からの問い合わせに対して調査のうえ回答をいただいた。記して感謝申し上げます。